「日々の理科」（第 3055 号）　2022, 12, 18

「初冬の高尾山紀行（４）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

キジョランの綿毛はどんどん見つかった。私も道端の倒木や切り株の隙間から、変形菌の菌核（休眠体）と思われるものを次々と見つけ、収穫は順調だった。

「サル園」を過ぎ、有名な「蛸杉」も過ぎた時だった。驚いたことに、登山道の脇にキジョランの実があり、まさに綿毛を出しているところだった。通りかかった八王子の観光協会の人が教えてくれたのだ。

露木先生の話では、これは大変珍しいものだそうで、キジョラン収集歴の長い露木先生ですら、こうしたものを見るのは初めてだそうだ。アケビの実のような形の鞘から、種子がぶら下がった綿毛が、今まさに飛び出そうとしている状態に見える。私は「飛び立つ一瞬」を見たいと思い、デジカメを動画モードにして数分間構えていたのだが、残念ながらその場では飛び立つ一瞬を見ることはできなかった。

今回は「山道」の３号路には入らず、まっすぐに１号路を山頂に向かった。少し早かったが、途中「八王子ラーメン」の昼食にした。相変わらず美味しかった。

薬王院の山内もたくさんの人で賑わっていた。東京を午後に出ても日帰りで山頂まで行ける山は、高尾山ぐらいしかない。薬王院も、すっかりコロナ前の賑わいが戻っているように見えた。

紅葉の盛りは過ぎていたのだが、まだまだ見頃の樹もあった。彩りの豊かな風景を見ながら歩いていると、登り道もまったく疲れを感じないから不思議である。